懸相文賣 二丁　上野花見 三丁　逢笛小袖 三丁
六尺袖 三丁　氣儘頭巾 四丁　浅草海苔 七丁
ゑゝ夜入道 七丁　女歌舞妓りつき太夫 八丁
左衛門家譜 八丁　三谷馬鈍貨舟 八丁　出手馬 九丁
山中平九郎鬼女話 十丁　戸瀬川土左門 十丁　九山筒花入社
相撲節 十二丁　出手道哲手高尾 十三丁

近世奇談考

一

さるのしたん

特撰庫

東柳窩

言の跡考序

搬演傳奇之書。爽々朗々。述天
設人之語。皆可以導愚蒙之凝。
三の情。可一の慰之事。皆可二
洞。豁胸。其戲謔快適之
貧。二被柄。下。祛長。死之惡魔。三
滑稽秋之熱血。上。其。獨人之
功。為。少。矣。然傳奇之

體以公遵之原不拘其格
郭拾百般呈伎倆真為逐
作之巧故現造化未生之人形
ミヤ界裏抽旦古未有之事
於億萬劫間之間創見乃
肆詭詞以美青天白日之世
界平淡語漫讀委巷婦女
之耳目倫使士君子之骨髓

竟使古人傳事不泯湮沒
以傳埋寃失信焉其逐世之害
亦為不少矣醒世恒言人長於戲
文恒作謬悠無稽之詞寫人名
無嘉遁之情所以單辭使讀
者解頤而不止歟以其伎倆名
於世須臾人就京師根傳之
而為其有稽之事跡逐捜

徒時之實。進雜俗說之妄。通
寢錄爲五卷。名曰十六奇跡
考云。一日携酒訪余村居。余
呼會客行酒。老人小解飲。在
席未探懷出一小冊子。謂余
曰。願俾生一言以增價焉。余
已沾醉。乃笑而頷之。其夜客
已散。將就眠。月尚射窗。

杜鵑頻傳。響。大桃燈側。靴
繙。光人書。仰臥覽之。初翻三四
葉。順流讀。逆則搜之。路路
幽蹤。而漸不佳者。如武陵桃
源步。著勝地矣。讀之其事。
多行。字字裏破。支離傳會之
浮說者。如入洞出洞而移於
世界矣。讀至末。多閒所未安。

見所見者如耆老相會說
魏晉以上之事矣其傳稽細
搜使二百年間偉事義烈之
湮沒埋冤者拔擢紹述
於再泰白於今日焉又其作拾
古人之遺文表往昔之風俗
時發而證之其言亦悲亦朗醒
士君子之眼者非前日戲文措作

耶媚之類也其決疑解誣功
亦不為不白冤不與金篇讀
畢而掩卷則村鐘報曙遂
興掃明窓手自酌卯酒二
杯攬筆而書之
曆紀文化元年甲子五月龍生月
關東醉客 鵬齋 [illegible]

醒〻老人。好事士也。然其學不无牛首蛇頰之書。天七地五之史。平生喜著小說野史。以鄙俚之言。善述人間常情。使靈如覆無如有。又使讀者。乍喜乍愛。乍樂乍悲。不知手舞足蹈焉。是以慈遠近。喜上下。莫不知醒〻而恍之者。嗚呼醒〻。萬階譚無用之言。而何使人至于此乎。蓋醒〻所出筆滿者。其素志如不能也。頃操二百年未而觀。聽者。名曰逆。世奇跡考。如文人任侠。及俳優娼妓之徒。事跡。傳者。訪之遺。搜之墳墓。以傳。沉沒。傳者。訂潤色失實者。地理沿革。街巷遷移。考之地圖。訪之古老。如遺器舊物。激之好事家。乃孟童謠俚言之類。悉記以存焉。訂正之覈。考據之精。毫無為附會之說。與異乎前日醒〻之作矣。醒〻之好事。於是乎見矣。夫人徒稱高遠遺卑近。醒〻則欲自卑近至高遠。其用心亦良有見解。世之悅醒〻者。讀此書而後知其有真乎悅者也矣。

知足齋　卷大任書

日醉 横宜

二百年事都會
地不平阿苧喜
事生業業不美
江戸俗又是人間
極楽場　一杖

近世奇跡考巻之一

江戸　山東軒主人著

一　懸想文賣

浅井了意が曽呂里狂歌咄寛文十二年板本曰。往當正月元日の朔日より十五日まで。年毎ふ無想文とて賣り。其出立ハ赤き布衣ふ袴の そバ〻ろくさろ。猶そふより前ふハ。烏帽子を着せろさや。中ごろハ 編笠をかぶり。覆面して。都の町〻を賣り。是を買人あれば ふくさ紙の中ふ。洗米二三粒入さろを。無想文とまづけて渡 を。一銭より百錢まで。代ハ人の心ふまかせを。扨その祝言ハ買る人 あるひハ夫婦のかゝひのる。或ハ商賣のる。又ハ物くる。その 外何ふてもの。のぞむをさまゝぐめでたくいひづけて。ふるを。

懸想文賣圖

寛文十二年印本
曽呂里狂哥咄
古畫模出ス

詞花堂藏本

元禄六年板本
誹諧系譜に
懸想文賣のうを
きろを狂哥咄の
説とおもひ引ばこゝふもとーつ

おもしろく賣りる詞。やさしうきこえーを。時世のあうさまふかーう
つされ。今ハこゝ絶りるふや。此ごろのうき人ハきうゝるも法。是ハ祇園
の犬神人ノル　ありや。又ハ桂の里より出る男ふや。そのあるおを知ぞ
○按るに。懸想文とハ。女さのさまふかけるものふハあるぞ。紙箱を懸想文と
あづけて。いまだ嫁せざる女の良縁をいのりしものゆゑめ。己ふ寛文の比ゝゝ
うゝ。な文以て詞。まぐ。○俳諧の系譜ようせふ入ーハ。寛文三年印本増山の井
ふ又ゆるがもどめ。その以前ふ又るゝあー

二　上野花見

此第一本ゝ云。東叡山黒門より。仁王門までの並木の桜の下ふ花見所
ゆ。松山のうち清水のしろふ幕をーらひて又る人おゝー。幕の
おゝき時ハ三百余あり。ちくあき時ハ二百あまり有。此外ふつぼ
ちゝる女房の上品の小袖。男の羽おりを。糸尚ようげゝう細引ゆを
おーて。桜の本ふゆひつけて。かりの幕ふーて。毛氈花ゆ　ろちきて

酒のむ〻る物ハあるゝまで。ぶ歌浄瑠璃踊仕舞ハ〻ゞ有るゝまゝ。本町通り町を始。首途あるもさゝもあゝも。町〻さゝて女房娘。正月の小袖を云ハ仕立ざ。花見小袖を成ゞまをこあ。結構ぶゞてある物ゞきに有〻るを見ておゝ。花より有る見るゝ。花の跡ハ空〻もりて。おゝ〻昼過より雨ふる。あるれども傘をもさゝざ。よさ小袖をすきとおしてゝくるを。是山みも又ながぶみもゝを云此文天和中のありさまをこまのあゝり又ゞゝ

○其頃の婦女の小袖ハ結構ゝいへゝも結紬をかきゝゝをさて今よりゝれハ甚質素ゝるものゝを

三　縫箔小袖

昔の婦女ハ。縫箔の小袖を礼服ゝを。京六条ゝ傾城町ありし時。寛永の頃までハ。是女ゝ地ゝ縫箔の小袖。ゝり箔の小袖を着ゝるゞ。島原ゝつりしより縫箔をひつたの鹿子を禁せられ一ゝ。箔山が大鑑延宝中写本ゝ五ゝ好事の者。無物のかゝりゝゞに用て。今ゝ残ゝるを見るゝゝ。結ゝ麻畧ゝる縫を一てゝゝゝゝゞ摺箔を一ゝるものゝり。今地白地黒ゝゞゝゝもの。其遺製欽。いつの頃ゝり金糸の繡いでゝて縫箔ハゆゝ唯縫箔屋ゝ云名のゝゝ残れり

古代ゝゝへゝゝも縫箔ハゝみくの者の若ゝことあれハゞる衣服ゝゝれゝもゝれくハ結の地ゝて縫ゝも甚麻畧ゝるゝこれ等をゝゝも苦の質素をおもふべ一

四　六尺袖

延宝天和のゝゝ頃ハ。一尺五寸を大ゝり袖ゝを云。たんざゝれゝ六尺袖をゝゝゝゝひ一ハ。其頃のゝゝゝゞ。一尺五寸四ッ合て六尺袖ゝ春臺の獨語ゝたゞべての男女の衣服むゝ一ハ極て質素ゝ。男子ゝも女子ゝも。十四五ゝ頃ハゝゝゝ袖丈ゝゝゝゝゝゝ。昔ハゝゝゞゝら尺の一尺七八寸を。極りゝゝ一ゝ。貞享の頃ゝゝ二

天和年間
上野花見の圖

尺ばかりあり。夫より中くやくもくありて。近き頃は二尺四五寸ある
もあり。○一蝶が四季繪跋ある。髪のつとゐりをこえぢ。あり袖大路を
まゝぶくと書しも。延宝天和の頃も。享保の頃と大ふ風俗のかはりと
ゝをゝるあるべし

五　氣保頭巾

獨語　ある江戸の婦女外ふいづるに。昔は氣保とて。くろき結ふて頭
面をつゝみ目ばかりをあらはしたりしが。其後綿ふて頭面をつゝみ
しは。我せあまり宝永のころまでもありきと云。寛政ふ。今江戸ふ。

お高祖頭巾と云もの。氣まゝ江戸中の遺製ふゝん

五元集　目ばかりを氣保頭巾の浮世哉　其角

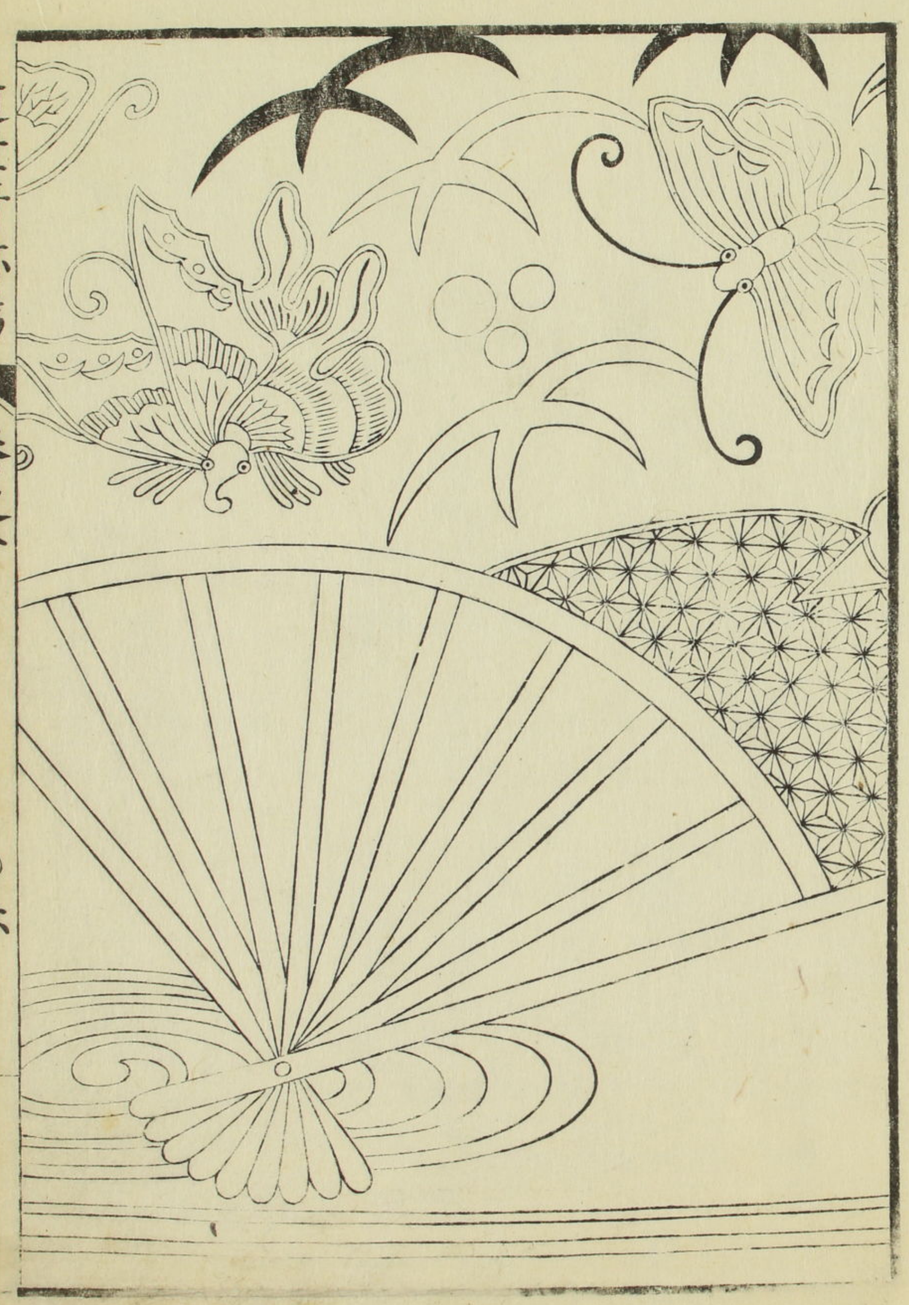
○縫箔　木村太朝藏

地紫リンズ。縫糸青黄赤。鶴リンボウ菊スベテ箔

此ヘリスベテ箔

○摺箔　或云箔絵印キノ種類　山東藏

地白茶縮。地紋金銀箔



○縫箔

○地茶リンス
○扇紺淺黄白萠黄桃色等ノ色糸ヲ以テ縫
○水金摺箔

木村氏所藏

六尺袖圖

貞享四年印本女用訓蒙圖彙に此圖あり もとさうつーふーてこふあふハそ
貞享の頃の婦女のさゐとゑふられり

蕙斎藏本

六　浅草海苔

其角が焦尾琴に元禄十四年板

上畧　石原の椎乃まげーそぐに人目まれなる覆ふ小家そむきくさ
てこあていさぶ川すぢ茂漫ーこる皆この流ふ入

其引　所の産を寄て

行水や何ふそぐまる海苔の味　其角

雨雲や簀ふ干　海苔の片明り　文士

寄ふ石前文に石原の椎とゆけるハ本ふ石原椎の本やーきとつよあるう
ちぐぐー浅草名物の干海苔ひりーハ浅草川みてこれをとりそこ本製ー
こるとー丁付ぐもいつの時までもありありーや詳ふ右の二句を考ふバ
元禄の時まで浅草ふて製ーこるとぐぐー海苔をあさふ時家中島原其
ふこしーに浅草川ふてこりーハまるふ遠きとこーーグ品川よりも勝苔
をこりよりて浅草ふて製ーこるハ。ちくきうまりー極品の海苔ハ味年
ぐりこきまでも浅草ふてきくーこるこき

七　夜入道

ゝゝ公のたそかれふるがくへまむし一夜入ゐるきるかや

堅目の影を見ふよく似る哉と思ひ寄て　雛屋　立圃

山の井

絵ふ似ゝろ〻かや〳〵夜半の月

此句正保の頃の吟之

八　女歌舞妓ゝゝさ太夫

そゞろ物語　ふ見一八今より原町大門通りふ有シ時代　ふて玉ル三月五日ゝゝきたる夫

かぶきをゝゝありて日本橋ふ高札をゝるる江戸ふ名を得一女ゝぶきち

ふ一そゝゝ中ふもゝゝき太夫ハ世ふ越又あかゝちやさ一く容顔美盛

ゝりゝめバ此ゝ舞妓をこそ又あゝ老若貴賤ゝんゝゝ見物ゝ云ゝ同時

中橋ふハく島丹後守ゝふ女舞妓ありゝゝゝ月書ふ又ゝ手ふ骨董集ニ

ゝゝ一ゝゝゝゝゝ

○右そゞろ物語ハ寛永十八年の板本ニ杏園藏本

九　左り甚五郎家譜

仏殿山門等の彫物古雅ゝゝ来由ゝ一ゝゝざるもみゞゝりに左り

甚五郎ゝ作ゝゝゝひて名誉ゝ一ゝゝゝゝゝゝいつれの時代ゝゝ

此の所の人ゝゝゝ詳ふ知ゝゝ人ゝ一ゝ其譜を得て始て時代

を知ゝゝの如一

左甚五郎　伏見人寛永十一甲戌年四月廿八日卒四十一歳

左宗心　元禄十五壬午年三月十九日卒七十一歳

左勝政　京今出川寺町住　享保十二丁未年五月十三日卒

以下畧

元禄三年板　人倫訓蒙図彙ふ。天正の比左りゝ彫ゝる名人あり云ゝ

亀文翁ゝ左甚五郎ハ関東ふハ不来播州明石ふ住りゝゝゝぞ

十 高砂屋看板

日本橋室町一丁目高家の軒の上に高砂尉と姥の古き木偶あり左り甚五郎が作と云伝ふ案ずるに原是高砂屋清九郎とて菓子屋の看板也其菓子屋ハ貞享板の江戸鹿子にものりたる旧家にて宝暦の頃迄ハここに住しが他所へ転宅せし時彼木偶に霊ありて不思議の事どもおほく此地をさることをきらふによりてせんかたなくここに残しおきぬ今ハ不用のものなれども霊あることをおそれてとりのけずとぞ。さるものにもあらねど一百余年を経る古物なれバたびたびの火災をのがれて今に残れるハめづらし

十一 三谷馬駄賃附

むかし三谷通の若人等ハ白馬白鞘の刀白革の袴白ちりめんの袖なりあつまりて白きを以て風流のすさみとぞ。寛文二年板小歌惣まくりと云本にみえたるにありて三谷へ通ひし駄賃附あり。左の如し

所々より吉原迄駄賃附の事

一日本ばしより大門まで　並のだちん弐百もん
馬奴二人にてむろぶしうたはせかざり白馬駄賃三百四十八文
一飯田町より大門まで　なみだちん弐百もん
まご二人にてむろぶしうたはせ錺白馬駄賃三百四十八文
一浅草見附より大門迄　なみだちん百三十二文
馬子二人にてむろぶしうたはせかざり白馬だちん二百四十八文

是白馬を好みし証也。又明暦の頃の小歌にも春の日のいとまあらばいざかけて柳にとまるハさぬくぞ。しろき馬にめしてかよふそのこよひこそまさりけれ

白馬驕不行章臺折楊柳と云唐詩の白を中もてはげくる歌ふるゝ。又白くろの袖べりを好ミ話あり五元集に

袖裏や茄よりけふ白くろり　其角

今の世歌舞妓狂言六方丹前の奴僕ハ揚まるハ白羊毛り白袖口白裏白キ帯ハ用ゐ。ゑ古風の残れるもの

十二　土手馬

浅草寺境内ハ馬道と云名の残れるハ三谷ゑの通路なる也〳〵

五元集　朝嵐馬の目で西く頭巾哉　其角

日　土手の馬くゝんをひげハ茱つみ哉　日

右の白ハ土手馬とゝるも三谷馬のゑゝ今日本橋ハ立て船くゝこゝゑゝふ舟人を土手馬とゝひ。嫖客ハつきて揚銭ゑりハ行。日雇の者を附馬と云も。むゝーの遺言あり

十三　山中平九郎鬼女話

普世ハかゝる話ハれゝ。むくゝ我家の二階ハ上りて鏡ハむゝ。狂言怨霊の顔をさゝ毎ぐハ工夫ー。ゝやせんゝくやもべきゝ。眼をよせ口を引ゝき心ハ学バせて。ゝくゝ白ひをこゝ。自然とおのれハ。おそゝーきだゝりの仕ゝを工夫ー。かくてこそゝけれ。鏡をゝふゝりて。おゝ天ゝ立上り怨霊の身ぶりをゝる折しも。其妻ハの心もあく二階ハ上りおひゝけゝ。其ありさまを見て。こハやのゝとさけびゝのけゝ毎ハゝれて死入りぬ。家内の者ゝの者ハ。ゝきて二階ハあゝまり。氣付ゝ茶ゝあゝ。ゝくゝして中ゝやくゝきゝゝりぬ平九郎思ひゝゝハ我

藝云精身ゐ入りて我妻をもかくのごとくいとんや他の見物をやこ。
大ふよろこび則ち工夫を以て。狂言せーに果ーて見物群集せし
とぞ 江戸著聞集 といふ書ゐ妻ゑ隅田川と云狂言。彼妻ゞ絶入せ
し時の工夫のようをかけるハ非ゐ。それより以前のすのよういづ
れの狂言ゐや。詳ゐゝ。案るゐ宝九郎ハ實惡古今の名人俳名
を仙家と云元禄中を盛ゐ経て。享保九辰年五月十五日没。谷中
常在寺日蓮宗ゐ葬る。法名を冷山院壽仙と云予ゞ骨董集ゐ宝九郎ゞ
肖像をあゞハせり

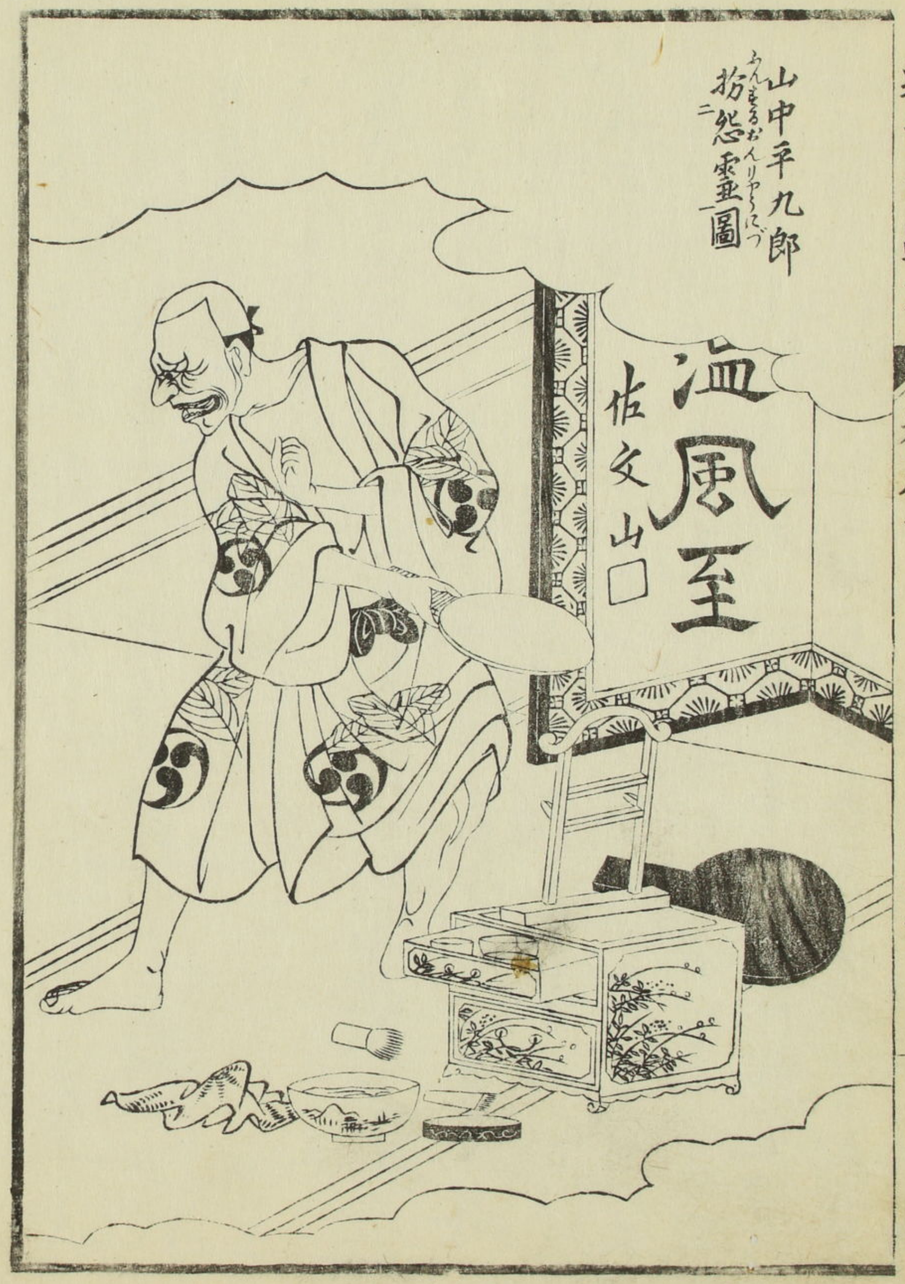
十四 成瀬川土左衛門

享保九年午六月深川八幡社地の相撲の番附を見ーゐ。成瀬川
土左衛門奥州前頭のもゝめゐあり。案るに。江戸の方言ゐ溺死の
者を土左衛門と云。成瀬川肥大の者ゆゑゐ。水死ーて渾身暴

ふくれるを。土左衛門の如ーと戯いひーゞ。つひゐ方言ゞ成りーと
云。八百屋お七の狂言ゐ。土左衛門傳吉ゞ云あるも。成瀬川ゞ名をか
り用ゐるものゞぞ。以上友人照義の説ゝ

十五 丸山筒花入

丸山權太左衛門。享保のもゝ。仙臺より出る相撲取。ゐのゝけ
六尺五寸。重サ四十三貫目。色黑中肥ゝ。手形を押るを見るに。人
寸余あり。予ゞ骨董集に蜀を一あり。ハもゝ相撲今昔物語杏園藏本云。大坂天幡川崎吉田
氏の先祖。丸山をまゐさて。力量を試ーゐ。竹ゐ規ゝ大竹のあ
りるを。ゝうてゐぢるゐ。吉田大ゐ驚誠ゐ希有の大力ゝ。此竹我
家の孫器ゝもべーゝて。ゐぢるる竹の上下をゝち。風流を尽ー
て花入ゝ。丸山筒ゝ銘ー。今ゐ傳へて秘ーるるとぞ。一年長崎の


山中平九郎
防怨霊圖
佐文山口
颯風至

相撲に下り彼地にてみまかりぬ。因に浩臺寺と云禪寺に葬る。長崎の入口日見峠と云道のかたはらに墓あり法名丸山良雄信士丸山嘗て。ひたひに丸き瘤ありて。山のごとくなりし故に。丸山といふ。墓碑のかしらを。そのかたちにつくり。瘤のごとき石をあげたりしとかたりぬ

蓼太撰 蓮華會集

一つかみいざまからせん年の豆　丸山権左衛門

(十六) 相撲櫛

元禄の頃を盛りに経たる。両國梶之助と云相撲取の櫛をさし始しより。其頃前髪ある相撲取櫛をさせる事はやりて鬼勝象之助面に白粉をぬり。二枚櫛をさしけるよし 相撲大全 に見えたり。彼の由来にあらせしと云ふ。其頃前つけと云事をとる事はやりけるが。彼等それをつれなきわざとし。まことならざる誹よりて櫛をさしけるとぞ。

諍ひの世は土山櫛を相撲取　沾徳

此句 文蓮萊 に見えたり。鬼勝が身まかりしをいたみし句となん

○両國梶之助 因幡。丈ケ六尺一寸五分 重サ四十貫目 ○鬼勝象之助 紀伊。丈ケ七尺三寸 重サ四十二貫目

(十七) 土手道哲并高尾

吉原恋の道引 延宝六年板本 堤のかたはらに道哲といふ庵あり。是をいふことふた。さりし明暦のころより道哲といひし道心者世をむつかしくやおもひなん。ならひもならず。ここに庵をむすびて住しが。二六時中鉦の声たえせず。ゆふつかたかよひ聞えて。いかなるも哀をもよほさぬはなし云々 紫の一本 天和三年写本 に。日本堤のきはに道哲が寺あり。あるものなに淋しきを道哲が鉦の声ありと今も百作ぶしの小哥にぞつちでうて道哲と唱も此寺之云々 事跡合考 延享三写本 杏園巻本 に。今戸橋

新鳥越の南。木戸ぎハ西方寺と云寺の前がし土高き所空地にて十間斗りの高さ。幅ハ二間ばかりもあらん所昔つみんどを刑せられしる処之。其の時道哲と云ふ道心者。彼罪人仏果得脱の為に昼夜念仏しけるが滅後此西方寺に葬りし由ゑに道哲の唱あり云と　沾凉説

に弘願山専称院西方寺ハ開山念誉上人之巡誉道哲ハ住職にあらず。常念仏発起の願主道心者之。徳ある僧にて世人當寺開山の如くに云来れり云と

案るに道哲在俗の時。三浦屋の高尾が私夫なりと云ハ妄説之　事跡合考の説のごとく罪人得脱抜苦の為定念仏しけるに吉原のできざる以前より住し道心者なるを疑なし。土佐ぶし　三世二河白道と云ふに高尾道哲が教化によりて成仏しけるよしを作りし

より虚妄を傳へしなるべし予西方寺にいたりてさがしぬるに。道哲万治三年十二月廿五日。高尾も同日に寂せしと云。されども　燕の道引　に。道哲菴の圖を出せるを見。　紫の一本　の文を考ぬれバ。延宝天和の頃まで。ながらへしやうに思はる。道哲が墓の年月を記さゞる由ゑに詳ならぬとぞんぜり

○汗かきの弥陀　立像三尺。安弥作。道哲持仏。
今西方寺本尊是之

○道哲之墓　同寺にあり。道哲の石像。定念仏の姿をきざむ
法号年月等なきさまぞ

○高尾襟掛地蔵　銅仏立像。一寸八分。高尾守袋へ入し仏なり。同寺にあり

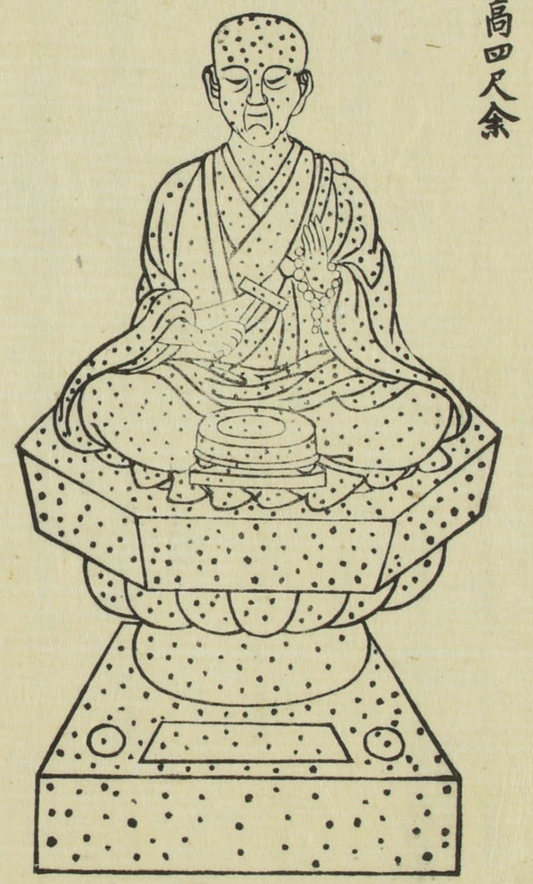
○同墓　同寺にあり。碑面に地蔵をきざむ。上に紅葉の紋あり。右に轉誉妙身信女
万治三庚子年十二月廿五日。左りに
「寒風にもろくもちる紅葉哉」とあり。墓のうしろに紅葉
高尾の紅葉と云。今のハ若木なり

○同位牌　惣高二尺余　同寺にあり。法名前の如し。

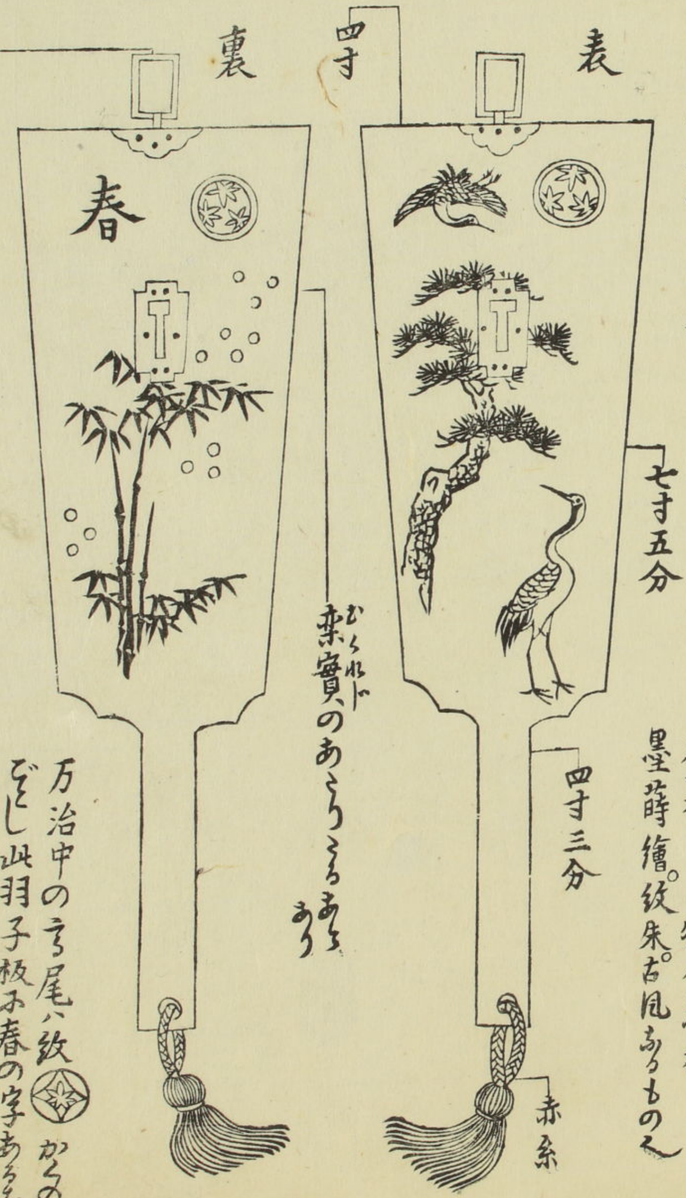
○同所持羽子板　同寺にあり。下に圖をあらハせ

道哲墓之図

惣高四尺余



高尾所持羽子板畫



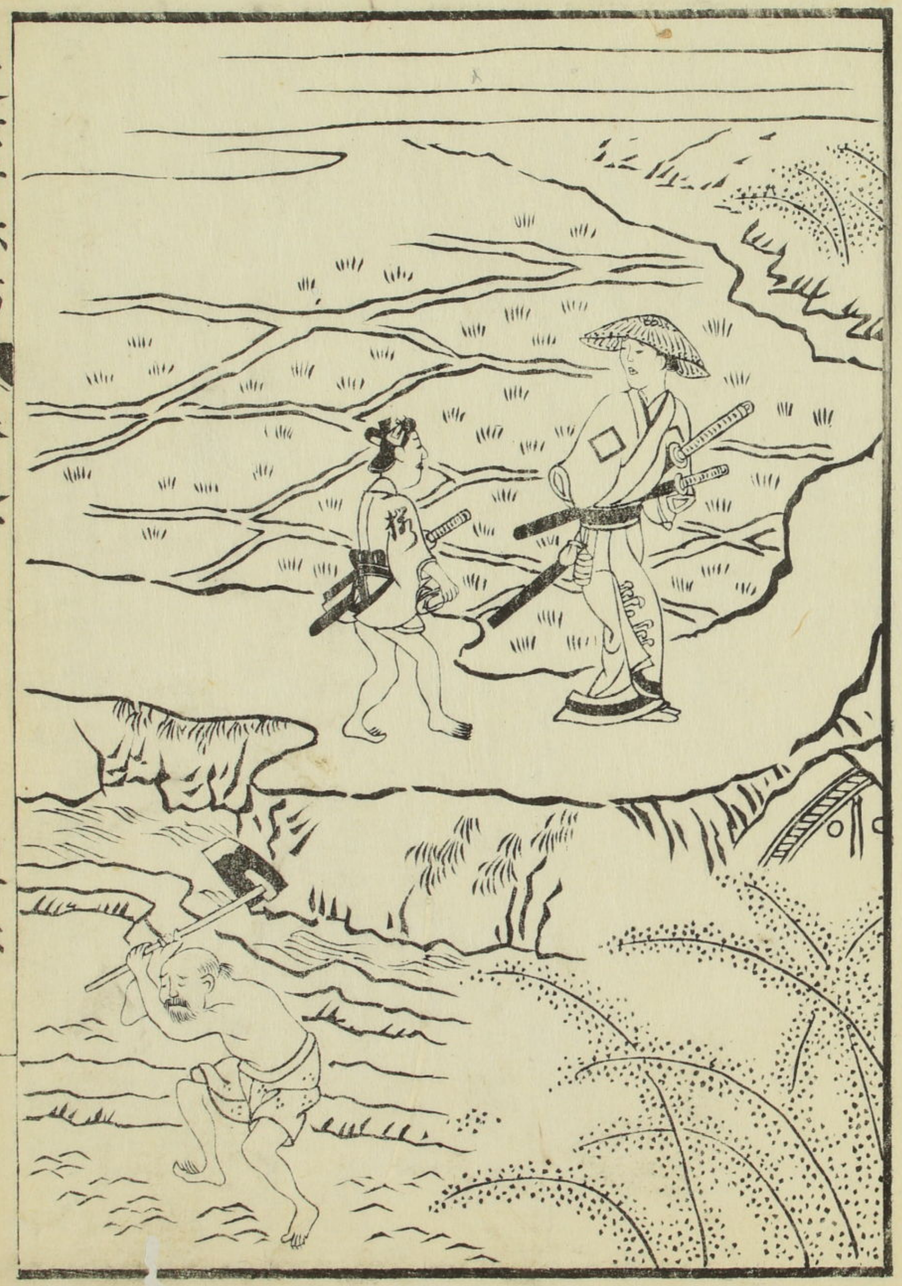
表裏ともに惣金摸様
墨蒔繪。紋朱。古風ありものゝ

楽實のあらうるあり

此金具ハ後ふつけて整擬ふるるものゝ

万治中の高尾ハ紋 かゝのごとし此羽子板ハ春の字あるを以て予が考あれどもこゝふハもふしつ

土手道哲菴圖
延享六年板
菱川繪本ノ
畠ヲ摸ス



○附云。所三谷町春慶院ゐも。ゐる尾の墓あり。法名辞世ハかあ〻じこいへ〻る。死せる年ゐ日ハかあ〻じ〻ゐ〻ぢ。方治二巳亥年十二月五日ゐ。ゐ〻ゐ〻是ゐトん

十八　小歌八云涛

貞享の頃。浅草田町ゐ住〻三味線の師人。小歌の上手ゐるゐよりて。ゐゐ名づくるゐ。

洞房語園　元文三年印本　ゐ云。小歌八ゐ〻ゐ娘。稼多ゐ不義して出奔せ〻を。八ゐ〻腹立して久離し〻ゐ。ゐ時並木寿見斎が狂歌ゐ

ぬゐ〻ゐ〻娘が中ハ海老尾かゐふかつゐふ歌八ゐ〻ゐ

○案ゐに。寿見斎八吉原角町ゐ住ゐ。其角門人ゐて俳名を不曲とゐふ

五元集　八ゐ涛やゐ〻ゐざゐるまい虎が雨　其角

此句ゐ小歌八ゐ〻ゐがゐゐとゐん

奇跡考巻之一終